

図画工作・美術教育の諸問題（9）

——小中学校の一貫性を高める図画工作・美術のカリキュラムの推進（4）——

清水 満 久

Problems in Drawing & Handicrafts and Fine Arts (9)

—The Promotion of Consistency in Art Curricula
at Elementary and Junior High Schools (4)—

Mitsuhisa Shimizu

Abstract

A new teaching guideline for elementary schools came into effect in April, 2011. Each school has been working to institute this in the manner that will be most effective for their educational system. Teachers and local governments involved with the subjects of Drawing & Handicrafts and Fine Arts had started the preparation as soon as the guidelines were announced. The guidelines advocate connecting the art curricula of elementary and junior high school across grade levels, with each level being appropriate to the students' developmental stage.

In this serial study I have explored how to design the curricula and how materials should be selected. I hope to show how arts educators can create curricula of Drawing & Handicrafts and Fine Arts that will make elementary school art education and junior high school art education more consistent with each other. In elementary and junior high schools it is most important to let students develop their artistic ability, based on their natural desire to express themselves and on the inspiration they receive from the shapes and colors of the materials.

With this in mind, in this paper, I analyzed and modified two types of real teaching plans originally used for virtual classes, one for the ninth grade and the other for the third grade. This analysis and restructuring suggest that, across grade levels, adopting Zoukeiasobi (Enjoyable art projects) stimulates children's interest in art. Further examination of curriculum-design and material selection in art-related subjects at elementary and junior high schools in various circumstances is necessary.

Key words: consistency in art curricula at elementary and junior high schools (小中一貫美術教育), drawing & handicrafts and fine arts (図画工作・美術), play with plastic art (造形遊び), supply of flexible, diverse materials (多様な題材の提示)

I 問題の所在と研究の目的

平成23年4月から、小学校において新しい学習指導要領が全面実施された。各学校では、新しい教育課程での円滑な指導に向けて、移行措置期間を通して準備を進めてきた。

図画工作・美術の教科においても、学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえて、告示後すぐに新しい教育課程の内容に即して授業運営ができるよう工夫してきている。とくに今回の改訂では、小学校図画

工作と中学校美術との一貫性や連続性が、より一層明確になった。両教科の学習内容の関連性についても指導計画の作成や研究授業等により、具体的に検証されてきている。

筆者はこれまで、小中学校の一貫性を高める図画工作・美術のカリキュラムをどのように編成するのかを提案するため、その考え方、題材の指導方法などに視点を当てて研究を進めてきた。

現在、各自治体での小中一貫教育の試みは、図画工作・美術の場合、子供たちの発達課題や造形的な発達の特性に照らして、教育内容が検討されている。また各教科等において今日的な教育課題と関連させ、より学習効果を高めるために様々に工夫もなされている。

このことは、前稿^(註1)でも論述した。前稿では、小学校の内容に位置付けられている「造形遊び」を取り上げ、中学校では具体的に文言としては明記されていないが、小中学校ともに造形活動の基盤となる内容として重要であることを確認した。さらにまた、「造形遊び」の内容の趣旨は、児童・生徒が、材料の形や色などの特徴から発想し、思い思いに造形活動を展開することであることを確認してきた。

本稿ではこれまでの知見から、小中学校一貫教育のなかで養う資質や能力を伸ばすための題材及び学習材を用いて、どのような学習指導を展開させていけばよいのかを検討する。

その実践例の一つとして、造形教育で身に付けるべき資質や能力をしっかりと押さえ、「造形遊び」の趣旨を取り入れた題材を設定することや教育課題に対応した指導により、小学校・中学校の題材に連続性をもたせることなどの重要性を明らかにする。また、表現の主題や材料用具などの経験の状況を踏まえた題材を適切に設定すること、及び今日的な教育課題に則した学習内容や展開の工夫の在り方について追究することを目的とする。

II 研究の内容と方法

本稿では小学校と中学校の図画工作・美術の一貫した学習指導の具体的な姿を明らかにし、造形美術教育の連続性・継続性に基づいた適切な学習指導の在り方を追究するため、小中一貫校における図画工作・美術の授業の実態を調査分析する。

本研究では、市をあげて小中学校一貫教育を目指し小中一貫教育カリキュラムを具体的に進めている、武蔵村山市立小中一貫校 村山学園の実践を基に、図画工作・美術教育の具体的なカリキュラムの一貫性、学習内容の連続性・継続性など、そのよりよい在り様について追究した。

1 武蔵村山市立小中一貫校 村山学園の設置と小中一貫教育カリキュラム

武蔵村山市立小中一貫校 村山学園（以後、村山学園）は、武蔵村山市立第四小学校と武蔵村山市立第二中学校とが、多摩地域初の施設完全一体型小中一貫校として、平成22年4月に開校した学校である。

武蔵村山市は、市全体で小中一貫教育を推進する立場から、「武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成等委員会設置要綱」を策定し、施行以前より毎年適宜、当委員会 各教科・領域部会（国語、社会、算数・数学、理科、生活、総合的な学習の時間、音楽、図画工作・美術、技術、家庭、体育・保健体育、外国語活動・英語、道徳、特別活動、特別支援教育、保健の全16部会）^(註2) において、カリキュラムの検討及び全小中学校での授業研究等を通して、具体的な授業改善の実践を進めていた。

武蔵村山市では、市として図画工作・美術の授業で身に付けさせたい力を、

本市の子供たちに育てたい図画工作・美術の力

- 生活の中の美術の働きや美術文化についての関心や理解を深め、生涯を通じ美術に親しみ、心豊かに生きようとする意欲と態度
- 造形活動を楽しむことを通して、感性や想像力を働かせながら、形や色など、及び材料や用具を選び、自分の表したいことを自分らしい方法で最後まで粘り強く表現できる力
- 作品等の鑑賞を通じて、そのよさや美しさ、面白さを感じ取り、自分の思いや考えを大切にしながら、自分の作品や生活に生かしていく力
- 我が国の美術文化への関心を高めるとともに、諸外国の美術文化のよさを味わい、理解する力

と、4項目設定し、目標としている(註3)。

「図画工作・美術の重点指導項目」(註4)では、「低学年部」(第1学年から第4学年)の「学習基礎定着期」,「中学年部」(第5学年から第7学年)の「学習充実期」,「高学年部」(第8学年と第9学年)の「学習発展期」,と学年を3段階に区分し,「図画工作・美術科指導内容系統配列一覧表」(註5)に「造形遊び」「絵や立体,工作に表す」「絵や彫刻」「デザイン・工芸」「鑑賞」を位置付けて,一貫した学習活動が実施されるように計画されている。

各教科の学習においても,人間力の育成へ向けて,「知的能力」「対人関係力」「自己制御力」の3要素を通して行うこととし,それを達成するために「4つの基本カリキュラム」として「言語力育成」「情報リテラシー育成」「キャリア教育」「心の教育」を設定し,「指導場面の学習計画」を作成して,授業実践を進めている(註6)。

本研究で取り上げる授業は,「言語力育成」及び「キャリア教育」の視点からの実践である。

2 本研究の観察対象授業

本研究では,村山学園の第3学年(小学校)と第9学年(中学校第3学年)の図画工作及び美術の授業の観察・記録等を取り上げ,分析と考察を加え,小中一貫教育カリキュラムの在り方について論述する。

観察対象授業は,次の通りである。

(1) 村山学園の第3学年(小学校)図画工作

「テープで絵をかこう」平成22年9月17日実施(以下[事例1])

(2) 村山学園の第9学年(中学校第3学年)美術

「伝え合おう! 感じた気持ち」平成22年9月7日実施(以下[事例2])

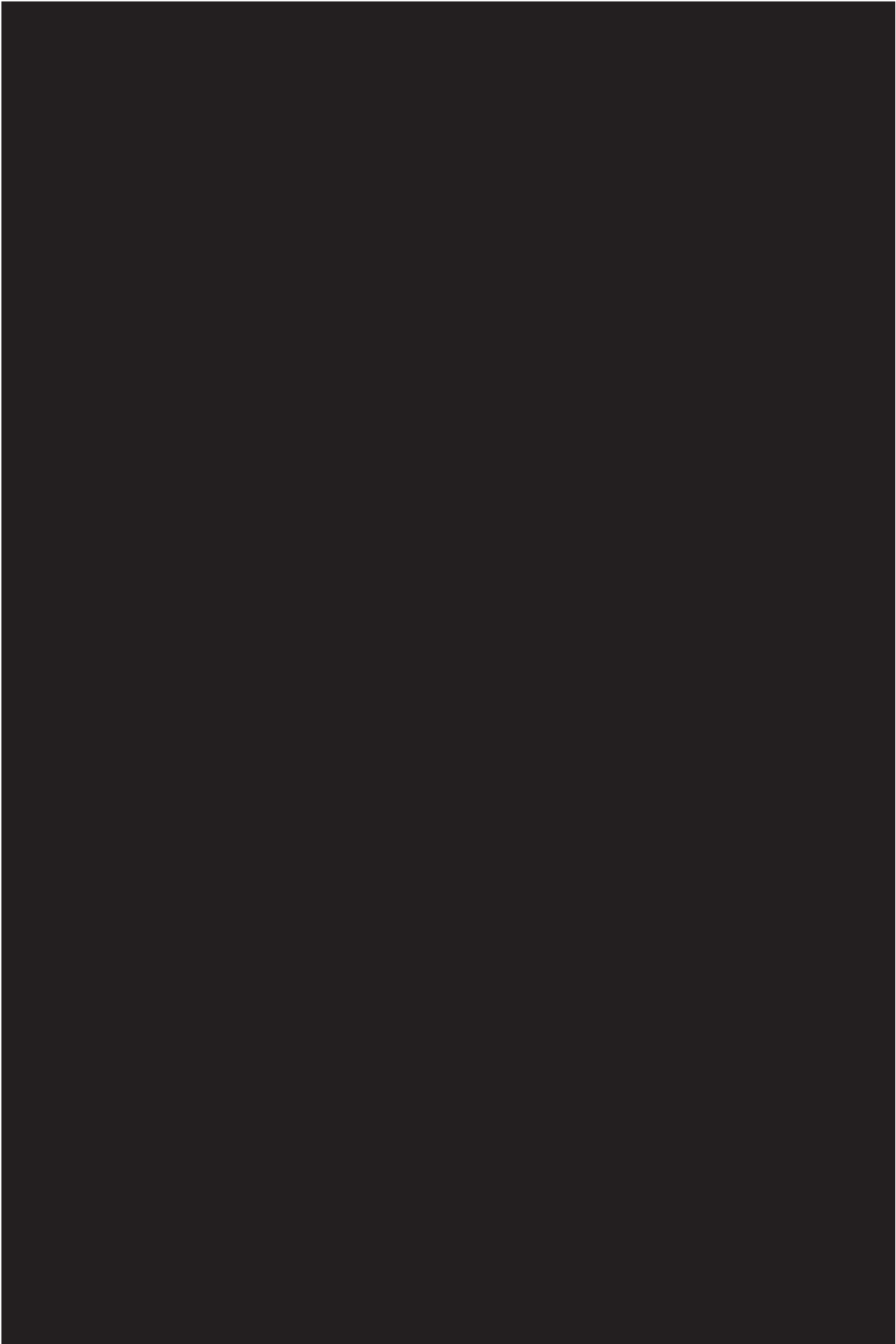
3 観察対象授業の内容

授業内容については,筆者が修正・改善した[事例1][事例2]の二つの事例を次に示す。

筆者は,上述した「武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成等委員会」「図画工作・美術部会」の指導助言者全6名の代表として,本委員会が設置されていた平成20年5月から21年2月まで,村山学園の授業に参加していた。









III 観察対象授業の内容分析と考察

1 〔事例 1〕の内容分析

本題材は、小学校 3 年生の造形的な発達段階を考慮して、表現意欲や形や色などを生かした造形活動を展開させたものである。カラフルなテープの色や素材の違いによる造形的な可能性など材料体験を十分に示して、表現活動では「言語力育成」「キャリア教育」との関連を図り、グループ全員で表現したいものを相談し、協力し合って創造活動を展開するように設定している。

「造形遊び」の材料を基にした造形活動の趣旨を生かして、造形活動の基盤として材料からの発想や材料体験を他のいろいろな題材においても位置付けることの必要性を示唆している。テープを使用したのは「A 表現 (2) 絵や立体、工作に表す」^(註 7) ものであるが、平面的な表現活動だけではなく半立体から立体へとつながる可能性をもった題材となった。

本授業は、①絵に表す内容をテープを使って表現することにより、多様な材料で絵に表す題材の可能性を示唆することができた ②半透明な素材のテープの特徴が生かされ、光を通した造形表現の実現とともに、他学年生にも鑑賞できる題材となった ③創造的な共同製作の活動を学習に取り入れ、自他の表現の相違などを経験させ、コミュニケーションを豊かにしながら表現内容を深め、協力的に造形活動が展開できた。

以上が実践の成果として考えられる。

2 〔事例 2〕の内容分析

本題材は、自分の作品や友達、下学年児童の作品をしっかりと鑑賞し合い、自他の造形表現における見方や考え方などの違いや共通する感覚などを、感じ取ったり、理解したりして、鑑賞の能力を養う内容である。

本授業では、美術作家の作品ではなく同じ校舎で学んでいる下学年生の作品を鑑賞するもの（6 年生は 9 年生の銅版画作品を鑑賞）で、身近な存在である後輩の作品から様々な刺激を受けて、共感や批評などを鑑賞カードに記入し、交流をする学習を通して、「言語力育成」を具体化することができる。

本授業は、①造形作品を鑑賞する視点を明確にして学習活動が実践されたことにより、鑑賞活動を深めることができた ②鑑賞カードのプレゼントにより、自他の作品の鑑賞内容の交換が行われ、言語活動が豊かに展開できた ③開始時に小学校の図工専科教諭が、6 年生の学習状況、作品の製作意図などを解説し、9 年生が鑑賞するに当たっての意欲付け及び親近感をもって感想を伝えたり、助言が行えるよう指導を工夫し、生徒の学習展開を豊かにした。

以上が実践の成果として考えられる。

3 〔事例 1〕及び〔事例 2〕の授業実践結果から考えられる小中一貫教育カリキュラムの在り様

この二つの事例は、施設完全一体型の小中一貫校における図画工作・美術の学習活動で、市の「4 つの基本カリキュラム」^(註 8) の「言語力育成」及び「キャリア教育」の視点から、授業展開を構想していることが肝要である。各学校において小中一貫教育を重視したカリキュラム編成を考えると、児童・生徒育成のため、共通する教育目標に基づいた教育実践であることは重要である。

本事例は、他の自治体や学校で小中一貫教育を推進していく上での実践上の指針となると考える。

IV まとめと今後の課題

本稿では、小学校図画工作と中学校美術との一貫性を図るカリキュラムの改善充実に向けた検討を行い、よりよい小中一貫教育における授業の在り方を提案した。

今回は小中一貫教育を施設完全一体型で推進している村山学園での図画工作・美術の授業を取り上げて検討したが、これは、施設完全一体型でなくてはできない内容ではなく、連携型一貫校や各小中学校とともに、工夫次第で実践可能な内容であると考ええる。本研究では、各自自治体の教育委員会等の教育目標や一貫カリキュラムの策定目標、及び今日的な教育課題に対応して指導計画作成を進めることが、一貫性のある学習活動を実現することにつながる指針であることが確認できた。

小中一貫校の教育の一貫性を図るためのカリキュラム策定に当たっては、今日的な教育課題や各自自治体の地域の状況を的確に把握して、実態に基づいた教育が実践されることが求められる。

本研究を深め、教育課題や地域に密着した教育の在り方を追究し、カリキュラムの改善充実に資することが今後の課題である。

(註)

- 1 「図画工作・美術教育の諸問題(6)―小・中学校の一貫性を高める図画工作・美術のカリキュラムの推進―」学苑 812 号 平成 20 年 6 月 昭和女子大学近代文化研究所,「図画工作・美術教育の諸問題(7)―小・中学校の一貫性を高める図画工作・美術のカリキュラムの推進(2)―」学苑 824 号 平成 21 年 6 月 昭和女子大学近代文化研究所,「図画工作・美術教育の諸問題(8)―小・中学校の一貫性を高める図画工作・美術のカリキュラムの推進(3)―」学苑 836 号 平成 22 年 6 月 昭和女子大学近代文化研究所
- 2 「武蔵村山市小・中一貫教育カリキュラム 図画工作・美術編」平成 21 年 3 月 武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成等委員会 図画工作・美術部会 p. 80
- 3 註 2 上掲書 p. 4
- 4 註 2 上掲書 pp. 4-5
- 5 註 2 上掲書 pp. 6-9
- 6 註 2 上掲書 p. 14
- 7 註 2 上掲書 p. 6
- 8 註 2 上掲書 p. 14

参考文献

- 「小学校学習指導要領」第 2 章各教科 第 7 節図画工作 平成 20 年 3 月 文部科学省
「中学校学習指導要領」第 2 章各教科 第 6 節美術 平成 20 年 3 月 文部科学省
「小学校学習指導要領解説 図画工作編」平成 20 年 8 月 文部科学省 日本文教出版
「中学校学習指導要領解説 美術編」平成 20 年 9 月 文部科学省 日本文教出版
『小学校図画工作科指導の研究』宮脇理監修, 新井哲夫他編著 2000 年 4 月 建帛社
「武蔵村山市小・中一貫教育カリキュラム 図画工作・美術編」平成 21 年 3 月 武蔵村山市立小・中一貫校カリキュラム作成等委員会 図画工作・美術部会

(しみず みつひさ 初等教育学科)